
二人のホームレス

いちは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人のホームレス

【Nコード】

N7153I

【作者名】

いちは

【あらすじ】

ホームレスのゲンさんと過ごした日々。

ホームレスのゲンさんと過ごしたのは一ヶ月くらいだったろうか。

当時、俺は九州大学の三年生。

一眼レフのカメラに凝っていて、フォトジャーナリストを目指していた。

戦場カメラマンの長倉洋海氏に憧れていた時期でもある。

まずはホームレスの生活に密着して、写真を撮らせてもらおう。そんな軽い考えだった。

正直に言おう。

ホームレス生活など、一週間ももたない。

俺がホームレス生活をしたのは、せいぜい三日。

あとは自分の家に帰り、シャワーを浴び、暖かい布団で眠った。

そう、冬だったのだ。

寒くてたまらなかった。

フォトジャーナリストを目指すとは言ったものの、

段ボールで生活するほどの気概もない、半端者だったのだ。

なるべく密着、それで一ヶ月間。

それが、俺の限界だった。

ゲンさんは、愛想が良かった。

酒の飲めないゲンさんは、酒なんか飲まなくても表情柔らかで、無関係な者からしても話しかけやすかった。

だから、俺はまず取っ掛かりとしてゲンさんを選んだ。

ゲンさんは二つ返事で肩を組んでくれた。

俺の服は汚れた。

十年以上前。

博多駅には、まだホームレスの人たちが多かった。自然、臭いもきつかった。

ケンさんは、犬を飼っていた。

薄黄色の毛並みの子犬だった。

近くで拾ってきたらしい。

ケンと名付けられた仔犬は、人なつこかった。

ケンさんの犬がケン。

ネーミングセンスに苦笑した。

ケンはカメラが好きだった。

というより、シャッター音がケンのツボにはまったのだろう。

ケンさんの写真を撮ると、ケンがカメラに飛びつく。

笑いながらケンさんがケンを抱きかかえる。

シャッターを切ると、ケンが嬉しそうにケンさんの腕を飛び出して、

俺のカメラに飛び掛ってくる。

ケンさんは齒の欠けた笑いを浮かべて言った。

「家なしのケンを、弟子にしてあげてよ」

ケンは、汚い舌で俺とカメラを舐めまくっていた。

俺がケンにお菓子を買っていくと、

「ダメばい、人間も犬も、甘やかしたらダメになるっちゃけん」

そう言っつて、ケンさんは俺からお菓子を取り上げた。

そして、次のセリフは決まっつてこうだった。

「ばっつてん、甘えば知らんとも、可哀そうかけんね」

そう言っつて、ケンにお菓子を与えるのだった。

俺は、ケンさんセコい、と何度も思っつた。

ところで、ホームレスの人たちは、犬を飼う人が多い。

猫を飼う人は少ない。

路上で生きる寂しさは、猫では紛れないのかもしれない。

皆、たくましく生きてるように見えても、

寂しさを抱えていない人は、皆無だ。

そういえば、一人だけ、いた。

寂しさを抱えていないように見える人が。

ツヤさんは、独りでのホームレス生活に寂しさを感じていなかった。少なくとも、そう見えた。

ツヤさんにとっては、道行く人全員が親戚だった。

「行つてらっしゃい」と声をかけ、「お帰りなさい」と一日を労う。そんなツヤさんは、博多駅では『挨拶バアサン』として気味悪がられてはいたが、

同時に、通行人からはうつすらと親しみのようなものももっていたように見えた。

都会に住む人は、誰だって、ほんの少しの孤独を抱えていて、薄気味悪い挨拶だって、毎日続けば、灯台の明かりのようになるのかもしれない。

自分は今日も、帰ってきたのだ、と。

ツヤさんとゲンさんは、仲が悪かった。

七十歳近いツヤさんと、五十歳前後のゲンさん。

仲の悪さの原因は分からない。

長年の確執というやつだろうか。

とにかく、ツヤさんはゲンさんにだけは挨拶をしないし、

ゲンさんも、ツヤさんの前を通る時だけは表情が固かった。

ゲンさんからは色々なことを教わった。

美味しい残飯のある場所。

高級料理店のエビマヨ、の残飯。

フグの刺身、の残り。
柔らかいらしい、牛肉ステーキのかけら。
もちろん、俺は食べなかつたけれど。

目の前でカップルがセックスする公園の茂み。
当然、俺は目を皿のようにした。
いかな寒空の下でも、そういう場では人間は寒さを忘れてしまつうだ。

行為に及ぶ者たちはもちろん、行為を覗き見る者たちも。

それから、ゲンさんが連れて行ってくれたのは、
博多駅から出てすぐの、隅の隅。
駅ビルのゴミが集められる場所。

そこで、ゲンさんは言った。

「おいはさあ、赤ん坊の時、ここに捨てられとあたよ」
ゲンさんの欠けた歯の隙間から、悲しみがこぼれてくるような気がした。

「おいはね、泣かんとよ。泣いたら負けやもん。
乞食やらこげんなつても、捨てたもんには泣き顔みせん。
そいが、博多もんっちゆう気持ちはあるたいな」
ゲンさんは笑った。

ケンが死んだ。

しや、死んだのではなく、殺された。

蹴り殺された。

酔っ払いの若者だった。

俺はその現場を、目の前で見ていた。

五人組の若者のうちの一人が、何か叫びながら、ケンを蹴った。

俺はちょうどカメラの手入れをしていた。

ケンは本当に、キャンキャン、と鳴いて、それから少し吐いた。

蹴った男の仲間たちは常識人だったようで、

「お前、なんしようとかや」

と、口々に蹴った男を諷めていた。

蹴った男は、酔った口調で、

「こいつが、チヨロチヨロしとうけん、あっち行けえて言うただけたい」

と言っていた。

俺は、そいつを殴りたかったけれど、ただ震えて座っていた。顔を赤くしたゲンさんが段ボールテナントから出てきた。

修羅場になるところだったが、五人組は素早く帰っていた。

あとには、俺と、傷ついた仔犬と、ゲンさんしかいなかった。

翌日、俺はケンに牛乳とお菓子を買って行った。

ケンは、埋葬されていた。

ゲンさんは、どういうわけか、ケンにお土産を買ってきた俺につきかみ掛かって、

「お前やるがっ、お前やるうがぁ」

怒った表情でそう言った。

俺は言葉が出なかった。

ゲンさんはすぐに正気になって、俺に謝った。

俺は、ゲンさんのところに行きにくくなった。

博多駅近辺を歩いていてゲンさんに会うと挨拶くらいはする。

しかし、それだけ。

なんとも言えない、気持ちの悪い薄い膜が、俺とゲンさんの間にあった。

俺は仕方のなさど自然さとの両方から、ツヤさんと仲良くなった。

毎朝、ツヤさんと一緒に通行人に「行ってらっしゃい」と笑い、

毎夕、「お帰りなさい」と声をかけてみた。

俺の形だけの挨拶に比べて、ツヤさんの言葉には暖かさがあった。

心がこもっている、という言い方はありきたりだけれど、ツヤさんに「行ってらっしゃい」と言われた人は背筋が伸びていたし、

「お帰りなさい」と言われた人は、笑ってネクタイを緩めていた。「行ってきます」「ただいま」と答える人がいなかったのが不思議なくらいだ。

ゲンさんと離れ、ツヤさんの挨拶に暖かさを感じ、俺は、ホームレス密着が嫌になった。

俺が、ホームレス密着をやめるとツヤさんに告げた日。ツヤさんが、ぼつりぼつりと話してくれた。

それは、彼女がまだ若い頃の話だった。

ツヤさんは、子どもを捨てていた。

正確には、物心のついた男の子を、置き去りにしたらしい。

「ちょっと待ったとき、母ちゃん、すぐ戻るけん。そげん言うて、逃げたとさあ」

ツヤさんは、脂ぎった髪の毛を撫でながら、そう言って笑った。

「あんちゃんは、絶対にそげんことしたらいかんよ。一生、一生」

ツヤさんは言葉を詰まらせ、押し出すように言った。

「そげんことしたらね、一生、泣けんとよ。一生、泣かれんとよ」ツヤさんは笑った。

ドラマチックなストーリーを後付けしても意味がない。

ゲンさんとツヤさんは、決して親子ではないだろう。

ゲンさんは赤ん坊の時に捨てられたのだし、

ツヤさんは物心ついた男の子を置き去りにしたのだから。

だけれどもきつと、二人は互いに知っていたのだ。

捨てられた側、捨てた側、ということ。

だから、仲が悪かったのだろう。

いや、仲が悪かったということではなく、互いにかける言葉がなかったのだ。だって、そうじゃないか。捨てられた子から、捨てた母へ、捨てた母から、捨てられた子へ、いったいどんな言葉がかけられるっていうのだ。

ツヤさんは、俺が大学を卒業する前に亡くなった。

彼女には俺の電話番号を渡していたから、それで俺も葬式に出席した。

ちっばけな、みすばらしい葬式で、出席者も少なかった。

火葬場で、懐かしい顔を見た。

ほとんど誰も泣いていない中で、号泣しているゲンさんだった。

ようやく、ツヤさんも泣ける。

俺は、泣きながら、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7153i/>

二人のホームレス

2010年10月11日00時50分発行